



巻 頭 言

コミュニケーションと「光学」

龍岡 静夫*

私がここで述べようと思うのは、光ファイバーを用いたテレビ電話でも、レーザービームでスクリーンにディスプレイするメッセージの話でもない。研究者・技術者の間の意志の疎通の話である。

雑誌「光学」の歴史を振り返ってみると、前身の「光学ニュース」も初めの頃は、光学懇話会が写真レンズや顕微鏡の研究者と産業界を中心に作られたということもあって、話題はいわゆる光学機械が中心であり、言葉は良く通じたと思う。

光学技術は歴史が古いだけ広く深く社会に根をおろし、個人にとっても生れてからずっと光に馴染んでいるから、誰もが同じように考えると思いがちだし、仲間うちではそう思っても問題はなかった。

50年代中頃から、レンズの評価に通信情報理論が応用され OTF の研究が盛んになると、エレクトロニクス技術の用語が光学技術に入りだした。レンズの設計を手始めに利用されるようになったコンピューターが普及するにつれ、その技術も用語も取り入れてきた。60年代にレーザーが発明されてからは、オプトエレクトロニクス技術の急速な立上りにつれて、新しい仲間が新しい言葉をもって光学の世界に入ってきた。それぞれの分野では、背負ってきた歴史が異なるので、なかなか融和できないところ（たとえば、レーザーとレーザ）もあるけれども、相互の努力で克服してきたといえよう。

今月の特集であるカラー画像は、印刷、映画、写真の分野から普及したが、本格的に家庭の茶の間に入るようになったのはカラーテレビジョン放送が普及した 70 年代以降のことかもしれない。最近では、新聞やコピーなどもカラー化されつつあり、ますます親しいものになっている。しかし、カラーは個人の感性に関係が深いこともあり、一方では分野ごとに技術的な差異が大きくて、幅広い理解は容易ではない。

「光学」は歴代の編集委員諸氏の努力により、異分野とのコミュニケーションの橋渡しの役割を果たしてきたが、カラー画像に関しても、古くて新しい問題が多いかもしれないが、言葉の通じた交流によって新しいものが創造できるような、そのような場を提供してくれることを期待する。